

# 感動体験の種類と文化的傾向 —日本人におけるホフステード指標との関連—

川嶋 優衣<sup>†</sup>　末神 翔<sup>†</sup>　正田 悠<sup>‡</sup>

<sup>†</sup>ヤマハ発動機株式会社 技術・研究本部 技術戦略部 〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500

<sup>‡</sup>京都市立芸術大学 音楽学部 〒600-8601 京都府京都市下京区下之町 57-1

E-mail: <sup>†</sup>{kawashimayui2, suegamit}@yamaha-motor.co.jp, <sup>‡‡</sup>h\_shoda@kcua.ac.jp

**あらまし** 「感動（Kando）」は心が動かされる複数の体験と、それに対する反応によって構成される概念であるが（Yasuda et al., 2022）、文脈への依存度など文化特性との関連性も指摘されている（Uemiya et al., 2025）。本研究では、感動における文化特性の影響を更に検討するため、感動反応尺度とホフステードの文化指標との関連性について、日本人 4690 名を対象として調査した。

**キーワード** 感動体験、文化的傾向、ホフステード指標

## Kando Experiences and Cultural Tendencies —A pilot study with native Japanese—

Yui KAWASHIMA<sup>†</sup>　Takashi SUEGAMI<sup>†</sup>　and　Haruka SHODA<sup>‡‡</sup>

<sup>†</sup>Technical Research & Development Center, Yamaha Motor Co.,Ltd. 2500 Shingai, Iwata, Shizuoka, 438-8501 Japan

<sup>‡‡</sup>Faculty of Music, Kyoto City University of Arts. Shimono-cho, Shimogyo-ku, Kyoto, 600-8601 Japan

E-mail: <sup>†</sup>{kawashimayui2, suegamit}@yamaha-motor.co.jp, <sup>‡‡</sup>h\_shoda@kcua.ac.jp

**Abstract** Survey on Japanese revealed some correlations between Kando reaction scale and Hofstede's cultural dimensions.

**Keywords** Kando, Cultural tendency, Hofstede's cultural dimensions

### 1. まえがき

#### 1.1. 日本における「感動」と個人特性

日本では「感動した」「感動的なシーンだ」など、「感動」という言葉が日常的に用いられる。しかし、「感動」は、日常の些細な出来事から一生に一度の重大な出来事まで様々な強度の原因によって引き起こされることが知られており[1][2]、従来の感情の類型に当てはめることができないとされる[3]。

Shoda et al. [4]は日本人 4690 名を対象に、「感動した出来事」と、その出来事に対する心身の反応に関する調査を実施した。その結果、「感動」を体験した出来事は「対人関係」「芸術」「自然・旅行」「達成」など 8 カテゴリに分類された。また、感動体験に付随する心身の反応として「ポジティブ感情」「爽快感」「あたたかさ」「超越した力」など 11 種が特定された。さらに、回答者の性別および年齢によって、感動体験のカテゴリと心身の反応の関係性が異なることも示され、体験者の個人特性によって「感動」を引き起こす出来事や心身の反応が異なる可能性が示された。

#### 1.2. 日本以外における「感動」

「感動」という言葉は東アジア地域でのみ使われて

おり、日本のか中国や韓国では使われるが、その他の国や地域では「感動」に直接対応する言葉はないといわれる。「感動」に類する表現の例としては、英語圏における“being moved”（心が動かされる）や“awe”（畏怖、敬畏の念）、サンスクリット語での“Kama Muta”（愛によって心が動かされる）などがあげられるが、それぞれの間には原因となる出来事の質や体験の強度、体験が惹起する情動の種類などの違いがあり、日本語における「感動」と完全には一致しないことが指摘されている[5]。

#### 1.3. 「感動」と文化的特性

世界各地で用いられる「感動」および「感動」に類する言葉において、原因となる出来事の質や体験の強度、体験が惹起する情動の種類などに違いがあることから、感動体験のカテゴリと心身の反応の関係性が性別や年齢のような個人要因だけでなく、文化のような特定の範囲の集団的要因によっても影響される可能性もあると考えることができる。社会学者であるホフステードは、世界各地の文化圏を「権力格差」「個人主義/集団主義」「男性性/女性性」「不確実性の回避」「長期志向/短期志向」「人生の楽しみ方」の 6 次元によって

分類した[6]。ホフステードによれば、これらの 6 つの次元で定義される文化的傾向は数十年単位で安定しており、物事の好ましさ判断や情動の喚起に影響する。1.1.で論じた通り個人特性によって「感動」を引き起こす出来事や心身の反応が異なるならば、個人特性に影響を及ぼす文化的特性によっても「感動」を引き起こす出来事や心身の反応が異なる可能性が考えられる。

## 2. 本研究

本研究では、「感動」を引き起こす出来事や心身の反応と文化的特性との関連性を検討するため、日本語を母語として日本文化圏で育った実験協力者に対して、「感動した出来事」とその出来事に対する心身の反応を定量的に評価する感動反応尺度[4]と、ホフステードのモデルに基づく 6 次元の文化的特性尺度[6]を実施し、その相関関係を検討する。ホフステードの 6 次元モデルは世界各地の異なる文化圏を評価するためのモデルだが、1.2 で論じた通り、「感動」は言語によって意味や強度が異なる可能性がある。世界各地の異なる文化圏を調査対象にした場合、調査で使用する尺度の翻訳が必要となり、言語の違いによる影響を受ける可能性がある。そこで本研究では言語による影響がない同一言語圏である日本文化圏に限定して調査を実施する。

## 3. 方法

**調査対象:** 日本語を母語として日本文化圏で育った実験協力者 6,454 名（女性 3,430 名、女性 3,024 名）にオンライン調査を実施した。実験協力者のうち 159 名はヤマハ発動機株式会社の社員、121 名は関西地方の私立大学の学部生、6,174 名は業務委託した調査会社のモニターであった。

なお、ホフステード尺度には日本文化に適合しにくい項目が一部含まれていたため、確認的因子分析によって適合度を低下させていた項目を除外した修正版を用いた。

**調査票:** 「感動した出来事に関する調査」という名目で、これまでに最も感動した出来事について記述するように実験協力者に求めた。実験協力者は、「妊娠・出産」、「音楽」、「災害」などの 20 カテゴリ（感動カテゴリ）の中で、自分が報告した最も感動した出来事が該当すると思うカテゴリを全て選択した。

**感動反応尺度:** 調査の冒頭で参加者が記述した最も感動した出来事について、感動反応尺度（11 因子 33 項目、[4]）の各項目がどの程度当てはまるか 7 件法により回答するよう求めた。この尺度は、感動に伴って生じる反応を 11 因子から測定するものであり、因子はそれぞれ「ポジティブ感情」「爽快感」「困難さ」「感動」「涙」「あたたかさ」「克服」「鳥肌」「恐怖」「超越した

力」「驚き」であった。

**ホフステードの文化的特性尺度:** 参加者は 6 次元で構成される文化的傾向を測定するための質問項目（24 項目；[6]）について、单極 5 件法で回答した。因子はそれぞれ「権力格差」「個人主義/集団主義」「男性性/女性性」「不確実性の回避」「長期志向/短期志向」「人生の楽しみ方」であった。

なお、上記に加え、対人反応性指標（单極 5 件法）、コンテクスト尺度（单極 5 件法）、および分析的・包括的思考スタイル尺度（单極 7 件法）も質問項目に含めていたが、本報告では分析対象外とした。

## 4. 結果と考察

**「感動した出来事」の分類:** 「感動した出来事」として提示された 20 カテゴリについてクラスタ分析を行った結果、6 クラスタに分類された（表 1）。

クラスタ名	分類されたカテゴリ
家族	結婚・恋愛・妊娠・出産・子育て・育児・家族
アート	文学作品・芸術作品・映像作品・音楽
自然・旅行	自然・宇宙・旅行・異文化
達成	受験・就職
人間関係	スポーツ・友人関係・人間関係・運命
ネガティブ	宗教・動物・ペット・災害・病気・事故・死別・離別

表 1 「感動した出来事」の各クラスタ

**感動反応尺度と文化特性尺度の相関:** 感動体験の各クラスタにおいて、感動反応尺度得点の平均と、文化特性尺度の平均の相関を算出した。その結果、一部のクラスタにおいて、感動反応尺度と文化特性尺度の間に相関関係がみられた ( $rs > .20$ )。

まず「自然・旅行」クラスタにおいては文化特性尺度の「長期志向」と、感動反応尺度の「爽快感」( $r = .22$ ) および「感動」( $r = .20$ ) との間で弱いながらも有意な正の相関関係がみられた ( $ps < .05$ )（表 2）。このことは、「自然・旅行」に関連する体験においては、長期志向の人ほど、その体験に対する反応として「感動」「爽快感」が強く感じられることを示している。この結果は、長期志向的な文化傾向をもつ人ほど、自然や旅行といった非日常的な体験を通じて感情の解放感を抱きやすい傾向があると解釈することができる。例えば、長期志向傾向が強い文化（日本・韓国・中国など）では、努力や節度、規律といった価値が重視されるため、旅行などの非日常的な活動が日常的抑制から一時的に解放されることを促すのかもしれない。

次に「達成」クラスタにおいては、文化特性尺度の「個人主義」および「長期志向」と、感動反応尺度の一部の項目との間に弱いながら有意な正の相関がみら

れた ( $p < .05$ ) (表 3)。具体的には、文化特性尺度の「個人主義」は、感動反応尺度の「ポジティブ感情」 ( $r = .22$ )、「感動」 ( $r = .22$ )、「あたたかさ」 ( $r = .21$ ) と弱い正の相関を示した。また、文化特性尺度の「長期志向」と、感動反応尺度の「あたたかさ」 ( $r = .21$ ) との間にも弱い正の相関がみられた。これらの結果は、「達成」に関連する体験においては、個人主義的な傾向をもつ人ほど、努力や成果が実を結ぶような達成経験を通して、成功や自己効力感に基づくポジティブな感情や感動を感じやすく、また、長期志向的な傾向をもつ人ほど、胸があつくなるといった感覚を感じやすいと解釈できる。例えば、個人主義が高い文化（アメリカやオーストラリアなど）では、努力や成功を自己の能力と責任に結びつける価値観が重視されるため、「自身の努力でやり遂げた」というストーリーが感動を喚起しやすいのかもしれない。また、長期志向的な強い文化（日本・韓国・中国など）では、努力や忍耐を重んじる価値観のもと、達成に至るまでの努力の過程の振り返りにより、胸が熱くなる感覚が湧き出るのかもしれない。

感動反応尺度	文化特性尺度					
	権力格差	個人主義	男性性	不確実性	長期志向	人生の楽しみ方
ポジティブ感情	0.12 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	0.00	0.15 <sup>†</sup>	0.12 <sup>†</sup>
爽快感	0.12 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	0.13 <sup>†</sup>	-0.05	0.22 <sup>†</sup>	0.11 <sup>†</sup>
困難さ	0.07	-0.02	0.03	0.02	0.01	0.04
感動	0.14 <sup>†</sup>	0.20 <sup>†</sup>	0.16 <sup>†</sup>	-0.05	0.20 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>
涙	0.12 <sup>†</sup>	0.15 <sup>†</sup>	0.12 <sup>†</sup>	0.02	0.15 <sup>†</sup>	0.08
あたたかさ	0.14 <sup>†</sup>	0.15 <sup>†</sup>	0.13 <sup>†</sup>	0.02	0.19 <sup>†</sup>	0.09 <sup>†</sup>
克服	0.13 <sup>†</sup>	0.10 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	0.01	0.15 <sup>†</sup>	0.09 <sup>†</sup>
鳥肌	0.15 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	0.12 <sup>†</sup>	-0.13	0.15 <sup>†</sup>	0.07 <sup>†</sup>
畏怖	0.10 <sup>†</sup>	0.01	0.00	-0.03	0.09 <sup>†</sup>	0.02
超越した力	0.09 <sup>†</sup>	0.10 <sup>†</sup>	0.09 <sup>†</sup>	0.05	0.17 <sup>†</sup>	0.13
驚き	0.15 <sup>†</sup>	0.12 <sup>†</sup>	0.12 <sup>†</sup>	-0.01	0.18 <sup>†</sup>	0.08 <sup>†</sup>

表 2 「自然・旅行」クラスタにおける感動反応尺度と文化特性尺度の関係性。赤字はピアソンの相関係数が 0.2 以上または-0.2 以下、<sup>†</sup>は相関検定の危険率が 0.05 未満であることを示す。

感動反応尺度	文化特性尺度					
	権力格差	個人主義	男性性	不確実性	長期志向	人生の楽しみ方
ポジティブ感情	0.01	0.22 <sup>†</sup>	0.12 <sup>†</sup>	0.00	0.13 <sup>†</sup>	0.08
爽快感	0.04	0.15 <sup>†</sup>	0.09	-0.05	0.13 <sup>†</sup>	0.05
困難さ	0.07	-0.02	0.03	0.02	0.01	0.04
感動	0.14 <sup>†</sup>	0.22 <sup>†</sup>	0.19 <sup>†</sup>	-0.05	0.20 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>
涙	0.15 <sup>†</sup>	0.17 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	0.02	0.07	0.08
あたたかさ	0.11 <sup>†</sup>	0.21 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	0.02	0.21 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>
克服	0.16 <sup>†</sup>	0.13 <sup>†</sup>	0.16 <sup>†</sup>	0.01	0.15 <sup>†</sup>	0.12 <sup>†</sup>
鳥肌	0.11 <sup>†</sup>	0.13 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	0.13 <sup>†</sup>	0.07	0.06
畏怖	0.17 <sup>†</sup>	0.01	0.00	-0.03	0.07	0.02
超越した力	0.18 <sup>†</sup>	0.15 <sup>†</sup>	0.11 <sup>†</sup>	0.05	0.16 <sup>†</sup>	0.13 <sup>†</sup>
驚き	0.12 <sup>†</sup>	0.12 <sup>†</sup>	0.14 <sup>†</sup>	-0.01	0.08	0.06

表 3 「達成」クラスタにおける感動反応尺度と文化特性尺度の関係性。赤字はピアソンの相関係数が 0.2 以上または-0.2 以下、<sup>†</sup>は相関検定の危険率が 0.05 未満であることを示す。

**本研究の課題と今後の展望:** 本研究から感動反応尺度と文化特性尺度との間に何らかの関係性がある可能性が示されたが、調査では総じて弱い相関関係しか認められなかった。この点については今回の調査が同一文化圏に所属する調査であったことが原因の一つと考えられる。本研究は、各尺度の翻訳過程で生じ得る言語的な要因の影響を排除するため、日本語を母語として日本文化圏で育った実験協力者のみを対象とした。しかし、ホフステードの文化特性尺度は本来、文化的特性が異なる複数の文化圏を比較するために設計されたものである。そのため、本研究のように単一文化圏内で個人差を測定した場合、異なる文化圏で実施した場合よりもデータの分散が小さくなると推察される。文化特性尺度の分散が小さくなると、統計上、感動反応尺度との相関も小さくなると考えられる。しかし、裏を返せば、分散の小さい単一文化圏での調査においても、感動反応尺度と文化的特性尺度の間に相関関係が認められた。このことは、文化的特性によって「感動」を引き起こす出来事や心身の反応が異なる可能性を示唆するものであり、今後は複数の文化圏を対象とした比較調査を行うことで、文化的特性と「感動」体験の関連性が明らかなることが期待される。

## 問合先

ヤマハ発動機株式会社 末神 翔

E-mail : suegamit@yamaha-motor.co.jp

京都市立芸術大学 正田 悠

E-mail : h\_shoda@kcuu.ac.jp

## 文 献

- [1] 前浦直哉, 中山真里, 内田由紀子, “日本における『感動』と『恐怖』の弁別性と共通性,”認知科学,

- vol.27, no.3, pp.262–279, 2020.
- [2] 大出沙耶, 今井亜湖, 安藤彰男, 谷口忠大, “主観的類似度に基づく感情語の分類,”自然言語処理, vol.14, no.3, pp.81–97, 2007.
  - [3] 戸梶亜紀彦, “『感動』を喚起する心理的メカニズム,”認知科学, vol.8, no.4, pp.360–368, 2001.
  - [4] Shoda, H., Yasuda, S., Uemiya, A., Yuhaku, A., and Isaka, T., “Uncovering the essence of moving experiences in Japanese culture: Development and validation of a *Kando* Reaction Scale.” *PLOS One*, vol 19, no 12, Dec.2024.
  - [5] Yasuda, S., Shoda, H., Uemiya, A., and Isaka, T., “A review of psychological research on *kando* as an inclusive concept of moving experiences.” *Frontiers in Psychology*, vol.13, Oct.2022.
  - [6] ホフステード G., ホフステード G. J., ミンコフ M. (著), 岩井八郎, 岩井紀子 (訳), 多文化世界——違いを学び未来への道を探る (原書第3版), 有斐閣, 2013.